

ハイデルベルク信仰問答より

問 120 なぜ、キリストは、神を「われらの父」と呼ぶように、私たちにお命じになったのですか。

答え それは、私たちの祈りのまずはじめに、私たちの祈りの導き手となるべき神に対する子どものような尊敬と信頼を、私たちに目醒めさせるためであります。それはキリストによって、神が私たちの父となることであり、私たちの父親が地上のものを私たちに断らない以上に、はるかに私たちが信仰において神に求めることを、拒みはしないからであります。

〔別訳〕

この方は、わたしたちの祈りのまさに冒頭において、わたしたちの祈りの土台となるべき、神に対する子どものような畏れと信頼とを、わたしたちに起こさせようとなさったからです。言い換えれば、神がキリストを通してわたしたちの父となられ、わたしたちの父親がわたしたちに地上のものを拒まないように、ましてや神は、わたしたちが信仰によってこの方に求めるものを拒もうとはなさらない、ということです。

今日から「主の祈り」の中身を見てまいります。この祈りの冒頭で、私たちは「天にまします我らの父よ」と神に呼びかけます。問 120 では、特に「父」ということばに焦点が当てられています。神を「父」と呼ぶことには、主イエスの深い思いが込められています。神を「父」と呼ぶ存在は本来、神の子イエス・キリストだけです。しかし、キリスト者は、主イエスが「アバ、父よ」と呼びかけたのと同じ親密さをもって、神を「お父さん」と呼ぶことが許されているのです。そこには、主イエスのこんな思いが込められています。「あなたがたは私の兄弟姉妹だよ。だから、私と同じ父を持っているんだよ。この方は、天地を創り、万物を治めておられる神様だよ。この方に信頼して生きていけば、心配する必要はないんだよ。」

「父」ということばは、私たちにどのようなイメージを抱かせるでしょうか。それは、地上の父親像によって、さまざまに異なるものとなるかもしれません。人は親を選ぶことができません。親から受けた愛情のあり方は、人間の心の基本的な安定感や、他者への信頼感に大きな影響を与えています。おそらく、私たち一人ひとりが、親との関係において複雑な思いを抱きながら成長してきたのではないのでしょうか。

筆者自身も、父親に対して様々な感情を抱きながら生きてきました。牧師であり、神のことばを取り次ぐ父への尊敬。教育者として、こう接してほしかったという願い。権威的な姿に対する萎縮。晩年の穏やかで愛情深い姿への感謝と憧れ。——そんな思いが、心の中に入り混じっています。

自らも親となり、父親としての不完全さを痛感するようになりました。自分の中に、父と似た側面を見つけることも、少なくありません。子どもたちに「どういうことで傷つけてしまったかな？」と尋ね、正直な気持ちを聞きながら、へりくだらされる経験も重ねています。

神を「父」と呼ぶとき、私たちはどうしても、地上の父親の姿を投影しやすいものです。けれども、そこから一歩進んでいきましょう。「父なる神」は完全なお方です。子どもに本当に必要なものをすべてご存知であり、最も良いタイミングで、それを与えることができます。愛には歪みがなく、偏りがなく、真実な思いやりに満ちています。私たちの小さな心の叫びも決して聞き漏らさず、どんな訴えも否定することなく、完全な共感をもって受けとめてくださるのです。私たちの心に刻まれてきた「父親像」は、この「天の父」の愛によって、やさしく塗り替えられていきます。心理学的には、「親替え」と呼ばれる現象があります。つまり、親との関係で受けた影響を、天の父なる神様との新しい関係によって癒していくことです。これは、キリスト者に与えられた、特別な恵みです。

主イエスは、慈しみ深い父なる神様を知っておられます。そこには、いかなる不満もなく、心からの愛をこめて「アバ、父よ」と呼びかけられました。私たちも、主イエスの心に一つになって、祈ります。「天にまします我らの父よ」——私たちのすべてを知り、心から私たちが祈るのを待っておられるお方へ、全幅の信頼をもって、呼びかけるのです。主イエスが御父に対して持っておられた「尊敬と信頼」——それを、私たち弟子たちも持ってほしい。それが、「主の祈り」を教えてくださいました、主イエスの第一の思いなのです。